

# 女性文学としての時代小説：戦後の女性作家の作品を中心に

李, 紹楠 / LI, Shaonan

---

(発行年 / Year)

2023-03-24

(学位授与番号 / Degree Number)

32675甲第562号

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2023-03-24

(学位名 / Degree Name)

博士(学術)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00026680>

法政大学審査学位論文の要約

女性文学としての時代小説  
——戦後の女性作家の作品を中心に——

李紹楠

## 序章

第二次世界大戦後、作家として活躍する女性が増えていき、特に 50 年代後半からは女性文学の隆盛期ともいわれている（『現代女性文学辞典』1990 年、東京堂）。また、60・70 年代の第二波フェミニズム運動の影響で、男性の作家や批評家の言論への批判と、女性作家・作品の掘り起こしや再評価という二つのフェミニズム文学批評の方法が確立された。現在、フェミニズム文学批評はすでに文学研究における重要な方法の一つになっており、その批評の対象も従来研究されてきた女性作家・作品にとどまらず、各ジャンルの新しい作家・作品へと広がっている。

とはいえ、大衆文学における女性作家の活躍について具体的に論じる研究は多いとは言えない。そもそも大衆文学全体が文学の範囲に属しながらも、今に至るまで文学研究の対象として扱われることが少ない。近代の大衆文学の誕生から系統的に論じる学術的研究は、フランスの日本文学研究者セシル・サカイが出版した『日本の大衆文学』（原著 1983 年、日本語版 1997 年、平凡社）以降、いまだ見られないようだ。

一方、2000 年以降の大衆文化の発展、特にサブカルチャーの隆盛とともに、文学・文化の研究の世界においても大衆的なものへの否定的な見方が変わりつつあり、個別のジャンルにおける研究成果が確実に増えていく。その中で、本論文では特に大衆文学において長く続いてきた時代小説というジャンルに注目する。時代小説は明治時代に流行していた講談の速記本から発展してきた大衆文学の形式であり、一般的には 1913 年から『都新聞』で連載が始まった中里介山の新聞小説『大菩薩峠』がその始めであるといわれている。

時代小説の作家というと、従来男性作家たちが注目を集めてきた。とはいえ、女性の時代小説作家の活躍も戦後ほどなくして見られるようになった。たとえば直木賞の受賞者を見てみると、1939 年第 9 回に初めての女性受賞者堤千代が誕生してから、2022 年 3 月現在まで、直木賞の受賞者のうちに女性作家が 44 人おり、その中で歴史・時代小説の作品で受賞したのは 14 人である。このように、

大衆文学における女性作家の貢献として、時代小説ジャンルの成果は決して軽視できないものといえる。

しかし、これらの女性作家の活躍とその作品群は十分に注目され、研究されてきたとは言いがたい。末國善己および原卓史は、それぞれ「研究動向 時代小説（戦後中心）」（『昭和文学研究』、2003 年）と「研究動向 時代小説（戦前）」（同前、2018 年）をまとめているが、その中に女性作家に関する研究への言及はない。時代小説においては男性作家が長らくその主流を占めており、さらにそれらに関する評論と研究も常に男性作家の成果に集中していることがわかる。

以上の状況を踏まえて、筆者は本論文の執筆にあたって次の問題意識を提示した。

まず、フェミニズム文学批評が大きく発展してきた今、時代小説における女性作家の活躍を明らかにし、その上で、特に異なる年代の作家や作品についてその多様性を指摘することである。本論文では、とりわけ女性文学が大きく発展してきた 50 年代後半から 2010 年頃まで、三部に分けて異なる年代にデビューした作家の作品を研究対象として取りあげる。本論文において扱う作品をはじめとする女性作家による時代小説は、たとえば剣豪小説や捕物帳といった特定の題材に偏ることがなく、その事実自体が男性作家とは異なる女性作家の視点の多様性を反映していると考えられる。

また、時代小説は主に近世以前の家父長制社会を舞台としており、それだけに従来男性作家が主流を占めていた。このような状況を踏まえて、本論文は女性作家たちがなぜあえて時代小説という形式を選んだのかという点に着目する。彼女らの作品において、どうして舞台を現代ではなく前時代としたのか、大衆文学としてそこでどのように現代人の、特に現代女性の心境を表現しているのか。また、それはこのジャンルの主流である男性作家の視点に対して、具体的にどのような異なる視座を提示しているのか。女性作家たちが時代小説のジャンルにもたらした新しい視座を解明する。

以上の問題意識に基づいて、本論文はフェミニズム文学批評の視点を取り入れ、戦後の女性作家の時代小説作品をそれぞれ分析した。ただ、時代小説作家の

人数は限りなく多く、すべての作家を論じることはできない。そのため、本論文では各部の課題に即して、異なる時代にデビューした、作品数や発表当時の評価、またテーマ性において代表的とみなしえる作家とその特徴的な作品を各章で取り上げている。

## 第一部 伝統に対する挑戦——50年代にデビューした作家たち

第一部では、大衆文学を代表する女性作家として広く知られている田辺聖子と平岩弓枝の作品について分析した。

まず、第一章「王朝文学からの継承と反逆—田辺聖子『王朝懶夢譚』—」は、田辺聖子については平安時代を背景とした『王朝懶夢譚』を取り上げている。本作では古典文学のモチーフが多く引用され、主人公が恋を求めて妖怪たちと冒険するストーリーが展開される。一方、本作は恋愛をめぐる冒険劇でありながらも、主に一人の少女の自立に焦点を当てている。特に、本作は芥川龍之介の「六の宮の姫君」と同じく『今昔物語集』を出発点として貴族の女性を描いたが、田辺は芥川以来の悲劇的な姫君の系譜を打破した。現代の大衆文学における王朝文学の新しい受容のあり方を示したと指摘した。

第二章「女性主人公像の確立まで—平岩弓枝『江戸の娘』を中心に—」においては、平岩の短編集『江戸の娘』を論じた。平岩は最初、大衆文学の大家、長谷川伸が主宰した新鷹会に入会し、長谷川を含めて男性作家が圧倒的に多い環境の中で小説の技法を学んだ。しかし、平岩は男性作家が作ってきたステレオタイプの女性像をそのまま継承するのではなく、最終的に従来の男性中心の剣豪小説や捕物帳の伝統を脱して、自立的な女性主人公を描く時代小説という新境地を切り拓いた。本短編集はその女性像の変遷が反映されており、同時に、希望を持つ女性像こそが大衆作家として提供すべきものであったというメッセージも読み取れるだろう。

デビューした時期だけではなく、生まれた時期も近い田辺と平岩は、ともに古典文学や伝統となりつつあったそれまでの時代小説の世界に親しんでいた。時代小説は彼女らの古典に対する新しい解釈を反映する媒体になったといえる。ま

た、両者の作品にはともに自立的で主体性が強い女性像が描かれている。従来の時代小説に見られる女性像のステレオタイプを否定し、より現代性がある人物像とストーリーを読者に提供しようとするという共通のメッセージが読み取れる。第一部で取り上げた作品にはいずれも、二人の作家が共有する、伝統への挑戦的な視点が反映されているといえる。

## 第二部 新しい江戸像の展開——80年代にデビューした作家たち

第二部は、時代小説の中でとりわけ多く描かれる江戸という町とその文化を新しい視点で表現する杉本章子と宮部みゆきの作品を論じる。

第三章「江戸社会の片隅に向ける眼差し—杉本章子「信太郎人情始末帖」シリーズ—」では、杉本章子の「信太郎人情始末帖」シリーズにおける江戸像と町人像に注目して分析した。本シリーズは幕末期を舞台背景にしながら、あえて武士階層ではなく、町人に代表される江戸の一般民衆を写實的に描いている。緻密な歴史考証に基づいて描出される町人の生活風景は、江戸の社会的様相を俯瞰的に表現し得ている。また、常に登場人物の視点に沿って描かれている江戸の風景は町人の心境を反映しており、とりわけ歴史上に起こった江戸の災害の描写を通じて町人の間の堅実なつながりを表現している。

第四章「半七捕物帳」シリーズの受容と再生—宮部みゆき『本所深川ふしぎ草紙』『幻色江戸ごよみ』—は、宮部みゆきの初期の短編集を分析した。まず、本章は宮部の作品における、綺堂の「聴覚型」怪談という特徴の受容を明確にした。また、宮部はその特徴を継承しながら、江戸時代の怪談文化を、90年代に隆盛していた「実話怪談」の手法で再構築したと分析した。このように、宮部の作品は、江戸の怪談を語り直す先駆けともいえる。

第二部で取り上げた作品は、ともに江戸を表現することに対して新しい視点を提示した。二人の作家は同様に権力階層の武士ではなく、町人に注目している。杉本はとりわけ町人の生活の全体像を写實的に表現しており、宮部は町人の生活に根ざしていた怪談文化を、現代文化を通じて発展させた。この時期において女性作家の作品はステレオタイプの女性像の革新にこだわることなく、時代小説

の題材と手法に新しさをもたらした。身分や職業、年齢も多様な女性人物を描いたことは、従来の女性文学批評がしばしば陥った一律的な「女性性」に対する反例となっているといえる。

### 第三部 女性問題への注目——00年代以降にデビューした作家たち

第三部において扱う作品は、さらに現代的な描き方を用い、江戸時代を背景に設定しながら現代のフェミニズム的価値観を強く反映している。

まず、第五章「女性の連帯の場としての吉原像—宮木あや子『花宵道中』—」は、江戸の吉原にある遊女屋山田屋を舞台として、過酷な環境を生きた女性たちを描く作品を論じた。女性の群像劇というと、しばしば女性同士が競い合う関係性を描いている。しかし、本作はそのような描き方に異議を唱え、女性の連帯という主題を通じて吉原像を新しく解釈している。生きづらさに直面する時、女性たちは連帯すべきだというメッセージが浮かび上がる。

第六章「ノスタルジーの幻想を超える女性画人像—朝井まかて『眩』—」では、それまであまり注目されなかった葛飾北斎の娘お栄（葛飾応為）を主人公とした作品を論じた。本作は絵師の道を追求したお栄の生涯を描いている。とりわけ今まで理想化されていたお栄の造形に反して、リアリティがある江戸の女性文化人の人生を描いている。現代でも依然として多くの女性が抱えている、介護と仕事の両立という問題も取りあげている。また、女性を主人公とする作品が少ない芸道小説の系譜に対して、本作は新たな女性絵師の造形を提示したといえる。

このように、00年代以降の女性作家の作品においては、女性の生きづらさや介護問題など、現代社会にも見られる女性問題の課題が強く表れている。作者たちの女性問題への関心が再び高まり、時代小説における女性像の新しさをさらに模索していたことがわかる。また、時代の変化とともに、女性作家が取り上げた題材の範囲もさらに広がり、視点や手法も多様化していると考えられる。そのうえ、90年代から00年代までの第三波フェミニズム運動が盛んになり、さまざまな文化圏において、男性によって作られてきた評価基準への強い抵抗が見られる。『花宵道中』に提示されている遊女像と、『眩』に描かれている女性絵師の造

形は、同じく文化面における女性像への革新として読み取れる。この傾向は第三波フェミニズム運動の言説ともつながっていると考えられる。

## 終章

以上の各章の内容を踏まえて、本論文の結論を述べる。

序章でも言及しているように、本論文においては、まず、女性作家の時代小説作品に見られる多様性を明示することが一つの目標である。以上において論じてきた作品は、まさに題材から手法まで、それぞれ異なる特徴を示している。その多様性に応じて、本論文は作品における人物像だけではなく、内容と関連する史料や先行作品との関係性にも着目し、さまざまなアプローチを行った。女性人物を中心としている作品群がある一方、多様な人物像を描き出す作品群もある。同じく女性像に注目している作品であっても、それぞれ異なる描き方を用いている。つまり、戦後の時代小説ジャンルにおいて、女性作家たちの活躍に言及する際に、単に人数と作品数の増加で示すのは不十分である。その内容において、いわゆる「女らしさ」「エンターテインメント」「大衆的」のような一律な批評では決して表せない豊かさがある。本論文は、今まで多く言及されてこなかったその多様性に対して分析を加え、部分的にはあるが証明できたと考えられる。

一方、女性作家が時代小説ジャンルに参入し、家父長制の時代設定のもとで作品を書くことにはどのような意義があるのか。

すでに多くの先行研究に指摘されているように、現存の歴史の記録はほとんど男性によって作られたものであり、そもそも書くことは長らく男性の特権であった。また、歴史の記録をベースとしている時代小説ジャンルにおいては、女性の声がまた長い間欠如してきた。時代小説は従来、男性中心の歴史を男性の手で再生産するものという性質を帯びていたといえる。大衆文学、さらに大衆文化において、男性によって作られたヒーロー像が延々と語り継がれ、男性主導の歴史のイメージがますます強まっていたと考えられる。その中で、女性作家が時代小説に参入することは、女性の介入できない歴史が再び創出される危うさに対抗する行為として捉えられるのではなかろうか。

本論文では三部にわたって主に 6 人の作家を論じてきたが、以下のような課題が残されている。

まず、すでに序章において言及しているように、時代小説の作品は大量にある。女性作家の作品だけに限定しても総数は膨大であり、まだ増え続けている。本論文で扱っている作家と作品は、その全体の量と比べると氷山の一角でしかない。さらに細分化して時代的な特徴について論じることも必要であろう。

また、近年において、時代小説の読者層における女性読者の増加がたびたびメディアにおいて言及されている。読者層の構成の変化と女性作家の増加の関係性も一つ注目すべきところと考えられる。

さらに、本論文では主に作品論の方法に基づいて各作品を分析しているが、時代小説に関する先行研究が現在でも比較的少ない状況の中で、今後の研究においては作家論の視点も必要であると考えられる。より多くの作家の作品を詳細に見ていくことで、本論文で概観した女性作家の時代小説の動向が、より精緻に肉付けしていくことを期している。